

(4)意見交換

1. 主要動向報告

(小松議長)

県内に就職する比率が県外に比べて低いですが、これは学生自身が県外に出て行きたいという希望が多いのですか。

(水野校長)

保護者の方からは地元で就職して欲しいという声を、かなり多くお聞きします。実はこの県内県外の分類なのですが、本社の所在地で基本的に分けておりますので実際勤務する事業所としては、四国の中にあたり、県内の中にあたりする場合でも統計上は県外でカウントされてしまうということで、でている場合がございます。それで、本校では以前同窓会名簿を分析しました折に、卒業生の6割強の卒業生が県内でいわゆる住所を所在して勤めているところでございますので、県内は、実質的にはもう少し高いのではないかと考えております。実はUターンの話とかですね、そういうようなことも時々聞きますので、私も最終的には、就職は学生の自己選択の話でございますので、4年生の学生には、平田委員が副会長をされている高専の「技術振興協力会」の会員の方からも、キャリア教育の一環として地元にも良い企業がありますよというようなことも含めて、情報提供としましては、努めているつもりでございますが、最終的には学生の希望となります。

(西岡委員)

最近、履修不足の問題が言われていますが、新居浜高専の場合は、そういう学習指導要領との関係で問題はないですか。

(水野校長)

高専の場合は、いわゆる小学校、中学校、高等学校と違まして国が定めるような学習指導要領というようなものはございません。高専設置基準等、若干の規定はございますが各高等専門学校で各高等専門学校に与えられました権限で、学校としての独自性をもったカリキュラムを組むということでございます。本校の場合は、世界史、日本史共に歴史もちゃんとできるように、地理も含めまして、できるカリキュラムを組んでいます。

(平田委員)

私は、新居浜高専の卒業生です。先程ちょっとお話を伺いましたけども、卒業生の会、つまり同窓会の名簿がここにあります。今では形だけになっております。それで最近見直しが始まっております。先程の報告の中に、ロボコン、その他行事がありました。今まで、我々は応援をしていないのではないかと反省しています。東京までチームが行ったわけですが、応援者がほとんどいない。多数の卒業生が関東、関西の地区に点在しているわけですが、その人たちが集まって来ないというような現状なのです。皆でもっと応援してやろうやないかという声が上がっております。今後期待をして頂きたいと思っております。以上です。

(小松議長)

高専としての同窓会組織はありますか。

(平田委員)

はい、「燧会」といって初めからあるのですけども。今までは形だけでした。

(水野校長)

いま、同窓会の話が出ていましたので、追加の報告をさせていただきます。これは大変嬉しい話だったのですが、昭和46年の電気卒業の方が、上海から去年の夏、メールを頂きまして「最近、新居浜高専は頑張っていますか、色んな形で感心を持っていますから」という手紙とメールを頂いたのです。その頃は、学生の海外短期研修を企画していた時ですから、ご相談したら私のいるシャープの会社に是非来て欲しい。そして、中国の若い人と是非交流させて頂きたいと、先輩の温かいご指示に感謝しています。今後とも是非そういう「ものづくり教育」という形でバックアップ頂けると本当にありがたいと思っております。

2. フォローアップ報告1

(米山委員)

前回、出席はしていないので質問するにもはばかるのですが、対応状況で書かれていることで一つだけ教えて頂きたいと思います。女子学生の確保の対応として、二つ提案されていて、一つは女性教員を増員予定と書かれています。女性教員を増やせというのは、校長先生に課せられている、大きな役目なのですが、人員、教員の採用方法とも密接に関係してくることで、完全公募にしていると、女性教員を優先的に採用することには直結しないのですが、それについて、何か戦略というか、何か具体的に増員を予定されると書けるようなことはございませんでしょうか。

(水野校長)

今3名の女性教員がおりますが84名中3名で非常に少ない一方、女子学生数は大体18%ぐらいでございますので、何とか増やしたいということでございます。来年2名採用予定なので5名になるという訳でございます。高専機構に相談をしまして、厚生労働省などの見解なども確認頂きましたところ、公募するに際して男女の比率が非常に極端に違っているような場合は、女性に限るといような公募も許されるというように見解を頂きました。私の方はちょっとそこまでやる勇気はなかったものですから、「女子学生の指導に、十分対応できる方」ということを希望条件に付して、それから同等の実績・能力の場合は女性の方を優先させて頂きますということを付記した公募要綱を作成しまして、広く求めたところ、女性の方の応募がございました。今、振り返ってみれば、結果的には同じ基準で見て適切な方だという判断に至ったということで、採用することになりました。

(西岡委員)

当校ではですね、ロータクト倶楽部というのがございまして、新居浜ロータリー倶楽部が提唱している倶楽部でございますけども、それらが地域の清掃活動とかで地域との関わりを持っているということでございます。もう少しですねロータリーとロータクトとの交流、前から言いながらなかなか難しいのですが、交流を活発にして頂ければ、学生がそういう方と突っ込んだ話ができるのではないかなと思いますので宜しく。

(水野校長)

本校にはロータクトクラブというのがございまして、ロータクトクラブは、普通、大学とかで地域の青年等で構成されている場合が多く、高専ではちょっと珍しいのですが、新居浜ロータリークラブの提唱ということでバックアップを頂いております。ボランティア的な活動を、年に何回かやっておるのでございますけど、私どもとしてもっと幅広い学生が、色々な形でロータリーの会員の方々のご支援を得ながらできればいいなと思っておりますので、是非よろしくお願ひしたいと思ひます。

(黒木委員)

先ほど報告されました、文部科学省の「現代的教育ニーズ取組支援プログラム(現代GP)」のお話の中で、資料を拝見して見ましたら、「まちづくりシンボルロボプロジェクト」という、何かちょっと面白そうなので、目に留まったのですが、新居浜太鼓台と別子銅山をモデルにしたロボットを製作して、やがて街の中にこの作品を設置するというようなことが書いてありましたが、これはどの程度、学生が関わっておられるのか、また、企業の方々と一緒にやっておられるのか、そして費用はどうかされているのか、ちょっと教えて頂きたいと思ひます。

(川崎高技センター長)

お答えします。高度技術教育研究センター長の川崎でございます。現代GPの「まちづくり活動」の各プロジェクトの取組には学生が多く参加しております。また、企業という点では、新居浜商店街連盟と喜光地商栄会と連携しておりますが、これは別の「商店街活性化パフォーマンスロボットプロジェクト」となります。このプロジェクトでは、検討を重ねまして、現在、商店街連盟の方では「熱血あきんどロボット」、喜光地商栄会の方では「銅板製の狐ロボット」の製作の企画が現在進行中でございまして、この3月の19日の成果発表交流会で計画を発表したいと思っております。なお、学生につきましてはまだ補助的ではありますが参加しております。

(水野校長)

ちょっと補足させて頂きます。昨年、新居浜の市長さんにも審査員になって頂いて、新居浜ものづくりの街シンボルロボアイデアコンテストというのを開催いたしました。地元の小中学生とか、本校の学生とか、一般の方に呼びかけまして、アイデアを出して下さいって、やったのですね。確か300弱くらい応募がありまして、その中からアイデアとしてなかなかユニークなものを表彰させて頂いたのですが、その中に小学校の方の提案で太鼓台「みかん太鼓」というのがありまして、そのアイデアをちょっと上手く使えないかということで、いま機械工学科の宮田先生が、卒研生と今、そのプロッ

トタイプのもととなるものを作っている段階でございます。それからもう一つ、銅滴ですね、銅の精錬の時にできます。それを使って別子銅山の昔の様子をパノラマ的に自動化してみせられないかという、これは本校の学生のアイデアがありまして、それを何とか生かせないかなということで、これは谷口先生を中心に卒研等で、今のところは設計というか3DCADの設計がだいたいできて、この通り作れば稼動するはずだということに差し掛かっているところです。完成品という訳ではございません。これから少し時間を掛けてやっていこうということでございます。最初はちょっと小ぶりの物を作ってみてちゃんとした物を作りたいなということでございます。少し以前になりますが、川之江の切山地区の方は、これは電子の先生でございますが、先生と学生とで人型のロボットを作って、それはもう現地に備え付けられて喜ばれております。また、商店街の方々とシンボルロボのアイデアの打合せなどを行っています。そういうことを3年間かけてやって行きたいということです。

(小松議長)

現代GPは文部科学省のプロジェクト経費として予算が認められていると思います。およそ1千万とか2千万でしょうね。ただ3年間という相当の経費が出るのではないですか。

(水野校長)

経費は支援頂けるので、材料費等含めまして大丈夫です。それで地域との連携については、今、小学校の校長先生、OBの理科の先生にコーディネーターを委嘱しております。また、今4名の技術者OBの方とデザイナーの方にプロジェクトアソシエイトということで、アドバイスをその時その時にいただくことができるようにして進めています。

(小松議長)

公開講座についてですが、小中高を対象に59講座、市民を対象に25講座が開講されているのですか。

(川崎高技センター長)

講座案内は、「テーマ」と「概要」をホームページで公開し、パンフレットは市役所等に配布をしたのですが、周知方法と説明に問題があったと思います。また、一昨年はものすごく案内が遅くれたこともあったので、今年は早く取り掛かったのですが、やはりちょっとPR不足かテーマに問題があるのか検討中です。今年度は、まだ6件しかないのですが、中学校等の方から依頼されたら日程とテーマを調整しながら、できる限り対応できるようにしています。それでやっていくという形で開設テーマの開示をやっているということでございます。

(桑田教務主事)

つい最近では、その小学校からございまして、初めてではございますけど、ちょうど私のテーマだったものですから、授業等をやりくりして学生も参加して、大変こういったことに学生が参加するというのが学生にとっても、今日の技術キャリア教育効果が非常に高いだろうというのがありますので、できればそういう風な方向でどんどん進めて行きたと思っています。ただ、これからは、どういうテーマがいいですかとかそういう情報を頂きながら、やっていきたいと考えております。ですから、59講座全部やっているのではなく、依頼があればできるという講座数です。

(小松議長)

59のテーマを出しているということですね。

(水野校長)

それに付け足して、お話申し上げますと、SPPの関係でもそういう教材開発をやろうというのが一つの柱になっています。人材育成として小中学校のものづくり理科教材を作ろうと、学生と一緒に作ろうということでやっています。ちょうど新居浜サイエンスクラブという名前を付けたのですが、市内の小学校中学校の理科に関心のある先生方や学校とメールによるサークルを作りまして、今10何校、あと若干科学館の方も入っています。理科の授業をやる上で困っていることとかアイデアとかをお互いに交流しあっていけば、だんだんやりやすくなるのではないかということです。高専で勝手に講座を開いてもマッチングが十分でないところがあります。

(小松議長)

非常に活発な活動を展開されているという印象を受けました。

3. キャリア教育の現状と充実策について

(佐々木市長)

いつもお世話になっています。学生が就職先を決める時に、企業、業種、職種または仕事の内容のことで悩みとか、関係のことだと思っておりますけど、新居浜市内、愛媛県内とか、その人の出身地とか、そういう学生がどういう思いを持っておられるのか、それが出身地に帰りたいとか、新居浜に残りたいとか、場所も大きな就職を決める時の要因にも、実際にはなると思っておりますけど、もしそういう傾向のようなものが、ご存知でしたらお願いします。

(檀上学生主事)

これについて、何て言うのですか、データを取っている訳ではございません。先ほど申しました個別な懇談でそれぞれの話を聞いております。それで、大体、先ほどの校長の説明に進路先ございました様に、3分の1、3分の1、3分の1、3分の1が県内、3分の1が近畿圏も含めた近畿地方も含めた地域、関東圏も含めた他のところ、その他というところで3分の1というが私どもが持っている感覚でございます。保護者の方はもう少し、先ほど校長も申しましたように、もう少し地元にていう方が多いのですが、やっぱりそういうやりたい職種がそれほど県内にないというような状況がございまして、近畿地方にまでならないということで対応していたと思っておりますが、それぞれの学科によって違いますので、もし主任の先生方ご意見がありましたら。

(刑部機械工学科主任)

機械工学科の刑部と申します。よろしくお願い致します。機械工学科の学生は割と県内が結構多い方だと思います。最近の傾向として、どうもその子供さんが少ないせいか地元志向が結構多くて、何割かと言われると困るのですが、4割から5割ぐらい、さっきの申告からいきますと5割近くぐらいですかね、県内が結構多いと思います。学科によっては、なぜか多少違うと思います。

(佐々木市長)

先ほど校長先生が言われましたように、就職先は個人が選択していくので、今の時代ですから、それこそ世界に羽ばたく人材も必要だと思いますが、市長としてはできるだけ、この新居浜市で力を発揮して頂ける人には、ぜひ地元に残って頂きたいと思うのです。市内にも就職先があるだけではなく、地域の魅力を高めていくのが我々の仕事なので、高専生が就職される時に、街の状況を、逆に学生達にこういうところがあれば、この街で働きたいと、というようなものが、逆にあると聞きたい気持ちになります。ないものねだりをされても無理なのですけど、大都市と同じようにはいかないけど、そんな気がします。今、全体の雇用状況としては、新居浜市内の求人数も増えていると思います。全体としては、職場としてもかなり広がっているのではないかと思います。企業の所在地である、市内、県内を含めて、そういうところへ是非、気持ちを向けるような企業の取り組みもお願いして、また、行政としても説明会をもって、是非この地域で頑張ってくれる街になるように、我々からも申し上げたい気持ちになっていますので、この雇用状況が良くなって来ている時期に、我々も頑張っていきたいと思っています。

(米山委員)

先ほどのご説明のアンケートの結果ですが、これは新居浜高専だけが悩む特殊な問題ではなくて、どこの高専も、よく似たデータになっているとは思っております。去る2月の初め、高専が対象ではなく、主として大学が中心だと思っておりますが、大阪において、認証評価に関するシンポジウムが開催されました。これは主として、大学・高専に法的に課せられている認証評価に対応した、シンポジウムでしたが、そこでの学習塾の方の講演で、私が在任中にはあまり気にしていなかったことについて指摘がありました。学校が、お金を集めていろいろなことをする。これはそもそも学生のためではないですか、ということから始まり、例えばJ A B E Eにしる、或いは先ほどの現代GPにしても、それが本当に学生のためになるということによってやっておられるのであれば、受験生にもっとPRしなさいということです。ただし、高専の場合は中学生と中学生の保護者が対象なので、年齢が若く、どの程度までそれができるかについて考えると、そう簡単にいく話ではないとは思っています。また、受験指導する立場からいえば、大学がPR目的で発行するパンフレットには色々なことが沢山書いてあって、受験生には分かり難い。PRを学生のためにやっているのであれば、もっとPRが受験生に役立つように工夫しなさいということも言われました。それからもう一つ、どういう人材を育成しようとしているかが入学案内書等には書かれていますが、具体的に入学してからの教育プログラムと、どう連結しているかということになると、全く、飛んでしまっている。つまり入学したらどういう扱いを受けるかということについては、漠然とした考え方しか把握できません。実際に最終の目標はここという形での理解がないままで入学する。これが大きい問題ではないかという話がありました。高専の場合は本科の5年で卒業する以外に今は専攻科もあり、また編入学もできますし、入学してからでも進路変

更はできます。このような入学後の進路の自由度の多さで、PRをすると、余計に悩みが出やすくなるというところが若干あるのだらうと思うのです。したがって、私が先に申し上げた高専のPRの改善方法については、簡単な話ではなくて、実際に受験生、中学生の保護者、中学校の先生にも、ご理解を頂くのはかなり難しい話ではないかなと思いますが、参考になればちょっとでも検討して頂けたらと思います。

(水野校長)

PRの関係ですね、確かに私たち中学校の先生に高専のよさを理解して頂くこと自体がかなり難しいなということを感じて参りました。それで、先ほどお手元にも配らせて頂きましたメールマガジンを、これは阿南高専が先行されたのですが、出はじめまして、1年経ちましたが、300名ぐらいの購読のうち、80名ぐらいが中学生または中学校の保護者の方なのです。従って、学生のちょっとした活躍ぶりとか、現代GPなどの学校での取組みとか、新しい教育の進めている様子とか、そういうものを分かりやすい形で伝えていくことかなという風に最近感じています。あとは進路、中学生、中学校では非常に柔軟な進路、つまり多様な進路、入ってからも、選択できるということを強調していきますが、それだけでは、なかなか理解は難しいなという風に感じています。

(小松議長)

最近大学に入学してくる学生は、入学して何を研究するのか、将来何になるのかとか、そういうことをほとんど考えていない学生が多いように思いますが、これは1年生のアンケート結果で悩んでいないというのが7割ぐらいいる訳です。ということは、入学の動機はかなりしっかりしているということなのではないですか。

(水野校長)

毎年、新入生のアンケートの中で入学動機を聞いています。それによると、結構就職ということについて、どこまでの理解かということはあるのですが、高専は、就職がいいということを知って就職のことを重視している学生の割合が私どもの学校の場合はかなり高い。これは高専によってすごく違うのです。どちらかというやっていると、進学もしてもいいかなという感じになってくる。ただ高専、地域によりまして、本当に違っておりまして、アンケートの結果でも、自分の将来のことについてということになるとかなりの例で漠然としている傾向がデータ的にもございまして、この悩みアンケートの結果をどう理解するかということについては、逆に私ども一年生に切実な問題として自分の将来を考えるという機会を与えてない、いや与えてなかったのかなという若干の反省をしています。つまり、考え出すのが遅いのではないかと、2年生になって、3年になって考えだしているという結果ではないかなと、もう少しその辺のところを含めて、1年生の段階から指導を行うことが必要でないか。実は工場見学を先ほど非常にやっているような説明をしてしまいましたが、1年生には必ずやろうということにしましたのは今期からでございます。混合学級である1年生は、学科別のクラス編成でないものでございますから、あまり工場見学を実施してこなかったということがございまして、ちょっとそれは改めてやはり1年生のところから「職業とは何か技術者とは何か」ということを自分の体験の中で理解が深められるようにしていきたいと思っています。ちょっとアンケートの結果の解釈は難しいところがありまして、私どもとしてはこのような分析、まとめ方をさせて頂いております。

(平田委員)

アンケートの採り方で、その悩んでいるという中に、1年生、先ほど仰っていたことなのですが、実は電気の方をやりたかった、横で見ているらどうも機械の方が面白そうというような場合に、転科をしたいという悩みがでます。その辺で悩むのは本物なのですけどね、そのことについて詳細に採れたら面白いという気がします。本当は、昔のことを言っただけとはいけないのですが、もう高専を選ぶ段階で、ボクはお兄さん達みたいに絶対に大きくなったら電気をやるのだと、というような気持ちを持っている子が多かったですね。ボクは機械をやるのだと、何でや、理由が知りたいとかいうように、でもこれはもう日本全体の問題なので事が大きすぎますけどね。だけど、PRをする際には色々これまでの活動も色々お聞きしましたが、そこまで踏まえた、中学生に対する教えといいますか、スタートをきってもらえたらと思うのです。

(黒木委員)

最近よく言われますけど、若い人たちが社会に入って、定着性が薄くなったというか、昔に比べると、次から次と職を変えていくのが、どうも社会的な課題にもなっているようなところもありまして、なかなか求人側と求職側において、意識のズレというのがどうしてもあるのではないかなと思います。、どんなに正確に、例えば理料系の場合は業種なりに、自分の技術の専門性を活かすということで、ある企業を選んだとしても、社風の問題、組織風土の問題とかで、なかなか口では説明できないところ

で、またミスマッチが起こるかも知れないところがあるのではないかと思います。だから学生さんたちが、就職してからも、息の長いフォローをするというのでしょうか、学生さんたちがどれくらい定着しているのか、10年間は定着していたとか、或いは企業の方に、率直にうちの学生はどうなのですか、そういう部分で意見交換をするようなことができないか、ちょっと素人ながら思いました。

(小松議長)

離職率については、七五三問題ということが言われていますが、この点についてはいかがですか。

(水野校長)

昨年の暮れに卒業して5年経った卒業生に、学校評価アンケートを行いました。高専で教育を受けた時の専門教育が今の自分にどれくらい役に立っているのか、また教養的な教育が役に立っているのか、英語の教育がどれくらい役に立っているのか、また、学校での教育を今振り返った時に卒業生がどう評価するのかというのが目的だったのですが、意外だったのは、私がイメージしているよりは転職している学生が結構いた、ということです。今ちょっと手元にないのですが、従来、高専は大学よりは転職の割合が低と言われておりました。そういうデータも見たことがあるのですが、今回の結果では意外と大学に近いのではないかという気がちょっと致しました。もう少しその辺りもきちっと調べることもキャリア教育をやっていく上で必要なという感じを持っています。あと学生が就職した企業に、卒業生に対する評価、注文という点のアンケートは別途実施しておりますが、大体企業さん、ちょっと遠慮がちになりまして高い評価で返ってくるケースが多いのです。これからも採用したいというようなことがありまして。いつも喜んでしまうような結果になる感じがちょっとございます。先生方で実感的なところで何かあれば。

(佐藤電気情報工学科主任)

電気情報工学科の佐藤です。2年前に担任をしたのですが、学生は、就職についての知識は情報誌とか就職担当の先生から受入れるのですが、最近はインターネットからもありますけど、会社の内容については、どういう仕事をしているのか、自分が何に向いているのか、分からないところがある学生が多いですね。大企業だからとか給料が良いからとか、大阪にあるからとか、そういうちょっと違うところで選ぶ学生が結構います。学生にある程度、そこまで突っ込んだところの指導というのは必要と思います。これは組織的にやるべきなのか、個人の先生ではちょっと難しいと思っています。それは何とかしないとイケない感じはしています。

4. 国際交流の現状と推進方策について

(米山委員)

質問です。日本人学生の海外留学等ということで、新居浜高専では長期に留学する学生が11名いますがこれは全体分ですか。

(深山国際交流担当教員)

はい、毎年ではございません。データははっきり致しました過去数年で11名が行っているということでございます。

(米山委員)

この人数は毎年の実績ではないということ間違いはないですね。そこで、ちょっとお尋ねしたいのですが、長期の学生は原則1年留年して帰って来られたらということですか。また、短期の交換学生ですが、これは3週間とおっしゃいましたね、このような期間で留学した学生の、評価はどのようにされていますか。

(深山教員)

長期の学生は1年留年を致しますので、1年遅れで他の学生と同じように進んでいます。短期の学生は夏休みの期間中なので、成績評価というような面では現在関係してございません。

(米山委員)

分かりました。

(小松議長)

これは単位互換のようなことはできないのですか。1年留年というのは少し厳しいような気がしますが。

(水野校長)

制度的にはできるのですが、3年生ぐらいで行くケースが多いので、向こうで学んできた内容が問題になります。学生が帰って来た時の報告をだいたい聞いておきますと、まず、英語教育を受ける期間がかなりの期間ありまして、そのあと、数単位程度の単位を取っているケースが多いようです。

ただ、その単位も様々でございまして、数学という場合もありましたけれども、高専の教育の代替として考えた場合、学生にとっては、本校できちっとした教育を受けた方が社会に出てからも良いのではないかとというのが今のところの我々の結論でございます。見聞も広め、英語力も高め、帰って来てTOEIC600点を取った学生がいました。

(米山委員)

今のことに関連して、1年の留学はなかなか難しいところですね。1年ですと例えば英語圏に行っても英語だけ勉強するわけではないので、学力認定には難しい問題はあると思います。短期の場合は、やっぱり私は国際交流をポジティブにできるだけ推進するというのであれば単位換算に入れてやるべきではないかと思えます。学生は単位欲しさに行くわけではありませんが、学校の姿勢としては、そういうものを積極的に推進するというを示すべきではないかと思えます。それで阿南高専では、色々和紆余曲折はあったのですが、英語に限定して、夏休みを利用して留学するという協定をアメリカの大学と結び、先方の学校での成績評価に取り入れるようにしました。色々な考え方で対応はできると思えますし、何らかの形で学校としてポジティブに対応した方がいいのではないかと思えます。

(桑田教務主事)

具体的にまだ検討はできてはいないのですが、今の状況は、卒業生としてそういったことをやったという実績とか成績の中にそれを反映させるということで、例えば進級するための単位とすることではなくて、卒業時にその与える単位として、入れていくような方向では検討しているところです。今回の研修も成果があれば先々はそういったことでの単位換算にも検討していきたいと思っておりますが、現在全くない状況です。

(小松議長)

新居浜高専に迎え入れた留学生の単位は認めているのですか。

(桑田教務主事)

留学生につきまして、現在は日本政府の国費留学生とマレーシア政府の留学生として、本校の3年生に入ってきていますので、1部の科目をそういった日本語の科目としてとか、専門の基礎としての科目、実際に個別的な授業をやりまして単位として認めております。

(小松議長)

学生の短期海外研修の参加は自費ですか。

(水野校長)

基本的には、自費になっております。後援会の方からは、研修をするに際して研修先の学生さんと

の交流経費や研修の中身の質を高めるために必要な経費を支援してもらっています。また、研修リーダーについては旅費等についても支援を頂くなど、致しております。

5. JABEEプログラムの改善状況

(小松議長)

非常にきめ細かい指導内容だと思うのですが、これは独自の方式ですか。到達目標であるとか、いろいろなことを書かせていますね、教員もまたいろいろされているようですが、これは独自に考えながらされているのですか。

(早瀬専攻科長)

色々なところから話を聞きながら、いいところを取り入れながら良いものを作っていつているという状況です。専攻科の場合は非常に学生が少ないということがありますので、何とかうまく行くのではないかという風に思っております。

(米山委員)

高専生の英語力がどうこうということ言われて久しいですが、最近はJABEEの問題もあって、どこの学校も一生懸命この問題は力を入れていると思います。ここに英語能力の改善ということで、項目をあげられているのですが、どうなのでしょう、入った時から、つまり中学卒業して入ったときから、毎年のように、学生の英語力をチェックしていくという評価が基になっているということでしょうか。その辺は如何でしょうか。

(早瀬専攻科長)

専攻科に入学してからのTOEICの点数ではみております。専攻によってかなりばらつきがありまして、非常に上がっている専攻とあまり上がっていない専攻があります。この違いというのはおそらく学生の雰囲気というか、取組みの雰囲気の違いで、例えば非常にTOEICに対して積極的に取組む学生が多い専攻については、それに引きずられてというか、ライバル心を燃やして一生懸命取り組んでいる学生が多く、成績が上がっておりますし、熱心でない専攻についてはあまり上がっていないというのが現在の状況じゃないかと思えます。

(米山委員)

修了要件が400点というのは決めておられるのですか。

(早瀬専攻科長)

それは入れておりません。

(水野校長)

本科の方の状況なのですが、まず入学した時点での英語に対する苦手意識ということですね。確かに私どもの学校の場合、入試が全国統一の試験なものですから合格者の英語の平均点が当然分かりますが全国の各高専の平均点も分かるわけでございますが、数学などに比べるとちょっと英語だけが評価が低い。つまりスタートの時点でうちの学生は少し低いので、おのずから苦手意識持っているのだと思います。それで、ここ数年、年に2回でしたかね、同じ問題で、1年生から5年生まで英語実力試験というのを実施しております。できる学生にも自分の学習達成度の一つの目安として、向上心を持って学習して欲しいということでやっているのですが、まだここでご披露できるほどの良い成果までは出ておりません。つまり、1年生から普通だと順調に、達成度は伸びていくはずだと、いうことですが、必ずしもそのようになっていなくて、学生の個人差が非常に大きいと、いうのが現状でございます。それで英語の先生方に色々考えて頂いておまして、今年も来年にかけて新しい試みで、多読指導ができるのですね、非常に簡単な英語のストーリーの教材がございますけど、それを図書館に大量に整備しましてですね、そういうものを活用して、結局あの授業の中で学ぶとか、授業の中で身につけるといっただけではですね、どうしても難しいということがありますんで、もう少し学校外と申しませうか、自学自習と言いませうか、そういう要素で、学生が取組み易いようなですね、またそういうものに向って、向き易いような教育指導と言いませうか、その辺で少し各先生方に努力いただこうと取組んでいるのが現状でございます。

(小松議長)

英語以外では何か改善されていますか。

(早瀬専攻科長)

この自己評価というのはまだ始めたばかりなので、まだ明確な回答はできないのですが、取組みが改善されれば、必ず向上するはずだということで今取組んでいる最中でございます。

(平田委員)

先程、国際化の話の時に、中国に行って向こうの学生さんと一緒に、行動するといったお話がありましたが、これはすごく素晴らしいことだと思います。おそらくその時に、ものすごい壁にぶつかると思っています。今言葉の問題がありますけれど、ものすごいショックを受けて、自分はこうなりたいたいというようなものが出てきて、多分、目標というものが明確に掲げられてくる。これで猛烈な勉強が始まり、

喜びを知ると、多分これが一番良いパターンなのだろうと思うのです。ですから、いわゆる机上だけでなく、若しくは試験の点数だけの目標ではなく、今回の企画のような生きた出来事があると面白くなるのかなと思います。特に高専なので工業英語とか、専門的な書物なら読め始めたとか、新聞ならOKとか、会話だけならいいのだとか、明確にすると面白いと思います。

6. 全体を通して

(白石委員)

南中学校の白石です。先生方には日頃から大変お世話になっております。今年度総合的な学習の時間、それから進路指導講座の講師として、おいで頂きまして大変ありがとうございました。先生方の積極的に地域に貢献しようという、そういう姿勢に大変敬服をいたしております。南中は、この校区内に高専があるということで毎年10人前後の生徒が大変お世話になっております。この会議に出席する前に、3年生の生徒に高専の学生、それから学校のイメージはどういうものかということで、ちょっと聞いて参りましたので申し上げます。良い点では、施設が大変に充実をしているということ、それから自由なイメージがあるということ。それから活気があって良いし、沢山の資格を取らせてくれそうであるとか、就職率が高い、自分が興味を持っていることに熱中できる、社会に多くの高専生が貢献していると思う、行事が多くて面白い、というのが良いイメージです。良くないイメージとして、自由気ままな感じ、外での態度が悪い、ルーズな感じ、というようなのが出ております。それから期待すること、希望することですが、高専に行く人を将来凄い技術者にして欲しい、各学科の定員を増やして欲しい、体験入学で部活動などを見学してみたかった、国領祭での催し・行事日程が事前に分かるようにして欲しい、ロボットなどの作品の無料展覧会、販売会の実施、更に専門的なところで活躍して欲しい、というような期待・希望が生徒の方から挙がっております。それで私は、以前から高専に対するイメージといいますのは余り良くありません。30年ほど中学校で勤務をしておりますけれども、中学時代大変真面目だった或いは優秀だった生徒が1年も経たないうちに中退、辞めてしまうというようなことがたくさんありました。高専に行かすには、よほどしっかりしている子じゃないとこれは本人が持たないなというようなのが私の以前の印象でした。今、大学などでは、中退生を少なくするために、かなりもう熱心に生活指導などもしておりますけれども、高専ではどのような努力をされているのか、お聞きをしたいことと。それから、市内5校と比べて、中退生が多いのか少ないのか、その理由は何なのかその辺をちょっと聞かして頂きたいと思っております。

(水野校長)

後で学生主事からも説明があると思いますが、中退、進路変更というのが私たちの言い方になりますが、最近で低学年での進路変更が増えているということが問題だと感じています。先ほども1、2年生で進路変更について悩んでいる学生が22名という数字が出ていたと思います。以前は3年の時に、進路を変えようかということが多くあったのですが、最近は、低学年のところで、課題があると。1つには専門教育への導入について、もう少し工夫がいるなど。中学校で学んできたこととの落差が大きくなってきているようなことがあって、私どもも出口のレベルを変えていないというようなこともありましてですね。そのことと基本的な社会的規範意識が必ずしも中学校の時代までに十分に身につけていない者に対して、自由の本当の意味を理解させるような教育を十分しないで、自由を認める時に学生がどういうことになるのか、自己コントロールが育っていないところで、どういうことが起こるのかということがあろうかと思っております。近年8、30登校運動とか、ショートホームルームも1年から3年まで必ず、15分やるという時間割にしています。また、担任制に、副担任を付ける。また、今年から学年主任を置いています。それぞれの学年を束ねる視点で、その学年の課題を主体的に、考え、解決に向けて、努力できるわけです。私どもとしては、やはり入ってきた学生が、その夢を育てられるような学校にしていきたくて努力しているところでございます。4年生は、207名いますので、来年はかなりの皆さんの卒業生を社会に出せると考えています。まだまだ努力が足りない部分がございますので、一層努力をしていきたいと思っております。学生主事から少し補足をさせていただきます。

(檀上学生主事)

市内の5高校との比較でございますが、年に4回市内の5高校と一緒に生徒指導会議がございまして、私もそれにずっと出ております。そこでの話しでは大体市内5高校合わせた退学者数と本校の退学者数がだいたい同じぐらい、という状況でございます。

で、先ほど悪い点ではルーズであるという南中学の生徒さんのご指摘は、すぐ近くにおいでですから状況を良くご存知でのご意見だと思います。私どもも今校長が申しましたように、ショートホームルーム・副担任制などを導入しまして、手厚い指導をとというようなことでやっておりますが、なかなかそれが追いつかない、学生の方が変化の方が大きいというのも実情でございます。それから、朝、門に立って登校指導したりとか、昼休みや休憩時間に教員が二人ずつのペアで周辺を巡回していたりとかですね、そういう風なこともやっております。それから1・2年生の低学年に対しては、やっぱり理念だけではなかなか口で言ってもききませんので、茶髪やピアスは禁止ですよ、というような形で、ある程度強制力を持った指導も導入をしております。高等学校ほど厳しくはありませんが、そう

いう指導をしていかないと、入ってきた時はまだ生徒だけれども卒業の時にはちゃんと学生になって自分でちゃんと考えて、行動できるような人に、責任を持って行動できるような人にしたいと、そのために低学年では、まず、ある程度強制力を働かせた指導を取り入れなければならないというようなことで、取組んで参っております。今、校長も申しましたようになかなか全部が全部上手くいっているとはいいがたいところはあります。特にこれは市内の5高校の傾向もそうですが、2年生が、現在の2年生ですね、これが市内の5高校どこもそうですが、トータルで見たら非常に問題行動が多い、いうので、やはり本校でも同じような状況になっております。まあそういったことで、周辺の方々からも色んなご助言を頂きながら、やってはおりますが、なかなか、何て言いますか、後ろから追っかけていくという状況も結構ございます。ただ以前ほど高専入ったら放ったらかしだというような感じではなくて、結構手厚く指導しているつもりでございます。それでも高等学校に比べたら足りないというふうなこともあるかも知れませんが、私どもとしてはそういう姿勢で、全ての教職員が取り組んでおります。例えば挨拶については、「おはようございます」とか「こんにちは」とか出会ったら挨拶しましょうということをお職員にも呼びかけて、取組んでおります。挨拶できる子はここ数年の間に相当増えました。急には全てが良くなるにはないのですが、そういうことを地道にやっていくしか方法はないのかなという風に今思っております。中学校の先生として何か良い指導のアドバイスがございましたら、教えて頂ければと思います。

(小松議長)

どうもありがとうございました。その他、何かございますか。

(市長)

色々とお教え頂き、ありがとうございました。キャリア教育も国際交流もそうなのですが、大学進学が目的になっている普通高校に比べ、高専は5年間において、その実社会の仮想体験ができるカリキュラムが組まれており、このキャリア教育は、高専に入学すれば、卒業までには身につけて、その後の一生の基礎ができていっていると思っております。仕事の話も出ますが、自分も高校生の子供がおりますが、何かをやるとしても難しい、高校生にもなれば、ただ漠然とした夢をもつのではなく、仕事をするという意味とか、楽しさ、辛さもあるとか、そういう現場の様子や話を聞いたり体験をしたり、海外に行ったり、経験を積んでほしいものです。普通高校では体験できない授業を、高専ではしているのですから、是非これからも進めて頂きたいと思っております。

これは私からのお願いと要望でございます。

(小松議長)

どうもありがとうございました。その他、何かございますか。

(川崎高技センター長)

先程、現代GPでの学生参加について質問を受けましたので、補足させて頂きたいと思っております。このような地域連携プロジェクト型のものづくり活動では、体験学習を通じた実践により、学生が教員との共同参加から、更に進んで学生主体の方向に活動が進展するように心がけております。そのため制度といたしまして「課題演習2」という1単位の演習を設けておまして、かなりの学生が参加するように計画しています。また、5年生につきましては「卒業研究」という正規の教育に取り入れまして、学生の参加を促し、実際に多くの学生が参加をしております。

(小松議長)

どうもありがとうございました。その他、何かございますか。

意見が出尽くしたように思います。

ご承知のように全国の地方大学の工学部というのは、どんどん人気下がっております、非常に苦戦をしております。どうも、中学生、高校生が「エンジニアリング」と、現在の「ものづくり」とがうまく、結び付けられないような状況があるようです。そういう点では、同じ悩みを抱えていますので、ぜひ理科教育にしても、工学にしても、一緒に、いろんなことを対外的に取り組むことが必要だと強く感じました。今日は貴重なご意見をいただきまして有難うございました。

それでは最後に校長に一言ご挨拶をお願いします。

(水野校長)

本日は本当に活発なご意見、ご議論、また積極的な前向きなご提言をいただきまして、本当に有難うございました。私どもは、やはり高専の持っている良さを、高専で学ぶことによって人間的な魅力が本当に画けるような教育を目指したいと思っております。その際はやはり地域と共同してやるような教育を目指して、その中で学生を本当の大人として、社会に貢献できるように育てたいと思っております。

また、本日は資料もご用意しておりますので、ぜひ、暇なときに目を通し、いろいろなご意見をお寄せいただくと共に、学内でも十分に議論をし、検討しまして、また、新しいことをやっていきたいと思っています。また、その状況につきましても、引き続き報告させていただきたいと思っています。

(小松議長)

それでは、本日の運営諮問会議を終了したいと思います。どうも有難うございました。